

大陸（満州）

緒戦を終え、満州へ

愛知県 藤田利雄

はじめに

私の戦争体験は「平和の礎」第十一巻（平成十
二（二〇〇〇）年）に一度「比島戦線・従軍記」
撃兵団として掲載して頂きました。

この度は「昭和十九（一九四四）年八月より、
昭和二十年十一月鹿児島上陸、復員までを除外し
て」、初年兵入隊以来の労苦を申し述べ、「平和の
礎」の一頁にでもと思います。

私は神戸の兵庫区にて誕生し、大阪の布施にて
成長しました。四人の男兄弟の四男でした。義務
教育終了後、府立都島工業中等学校を経て、旧制
京都工芸専門学校を卒業しました。家業は土建業
でしたが、業界は日進月歩の発展の一端を進み、
父親が鉄工業にも手を出し、手広く業績を上げて
いました。

大正時代の恐慌から昭和初期の大不況時代に、
一人類笑む輩は、軍隊の陸軍や海軍部に取り入っ
た工業・産業・商業関係組織でした。私は家業の
手助け半分、遊び（レジャー）半分で、家用自
動車を乗り回すために運転免許を取得しました。
これが後で大変役立つことになったのですが、そ
の頃は知るよしもないことでした。

日本男子の一大義務の徴兵検査、昭和十五年徵集です。大阪の小坂で行われたと記憶していません。あまり頑健でないために「第二乙種合格」（第一補充兵）でした。軍隊経験のある先輩が「第一補充は現役より先に召集が来るぞ」という通りに、昭和十六年五月に教育召集令状が来ました。教育召集の令状は「白紙」でした。三カ月の体験入隊だと聞いていました。

中部第四十九部隊の留守部隊で、兵庫県青野ヶ原にある「戦車部隊」でした。入隊翌日に全員に任務部署が割り当てられました。そして第一番に戦車搭乗員が選出され、自分は自動車免許証所持者でしたので一番先に指名されました。次いで自動車要員（歩兵訓練）及び後方段列（弾薬・糧秣輸送）等々でした。

戦車搭乗者教育を受けることになり、あの鉄の箱の中で、身動きひとつできない状態での訓練は、大変厳しいものでした。自動車組も大変厳重な教育で、夜間内務班にて涙を流している戦友も

いました。それは古年次兵の私的制裁によるものでした。その点、自分のように戦車乗りには比較的寛大（依怙鼻貞）だったと思われました。三カ月の教育期間だけだ、「辛抱」して帰るのだと戦友達で話し、一生懸命訓練に精励しました。

ある時、教官から呼び出され、中隊長室において「藤田、貴様は幹部候補生を受験せよ」とすすめられました。職業軍人を忌避し、一日も早く帰宅を望んでいるとは申せず、ただ「自分は一兵士で国家に御奉公申し上げます」と申し述べました。しかしその翌日、「教育召集解除」即「臨時召集」にと切り代わり、全員が戦車第六連隊補充要員となったのです。

昭和十六年十月、外地出動の命令が発せられました。㊦の行動でした。各人・家族宛に遺書と遺髪を封筒に入れて提出、それは中隊長室に保管されました。精神的には極度に緊張しました。

これ以下は、前述の「平和の礎」（第十一巻）

に掲載しています。

昭和十七年二月十五日のシンガポール陥落まで、馬來戦線に従事しました。なお英軍のシンガポールのブキテマ高地は難攻不落の要塞でした。大砲の弾丸を、いくら撃ち込んでも微動だにせず、敵も健闘していません。友軍の臼砲によって「ドラム缶」のような火災用弾薬を打ち込みました。弾道が直上・直下形というもので、敵陣の頭上から滝のごとく火焰が要塞に流れ込んだのです。さしもの敵陣も白旗を打ち振っていました。

自分達の戦車も、この海峡を渡るのにいかにすべきかと思案していますと、工兵隊が鉄船にて（人柱のごとく）橋梁を架設してくれました。この友軍の温かい涙の犠牲的精神にて戦車は対岸に渡ることができました。

また、その数日前には、歩兵部隊の突撃隊が先陣を切って馬來半島を南下し、シンガポールを目標した銀輪（自転車）部隊が猛進軍をしたことは、日本国中にニュースで流れたとか、後日聞き

ました。

シンガポール陥落後の翌昭和十七年二月十五日、対ロシア戦線増強のために、我が戦車部隊には北滿へ移動命令が出ました。良好な港湾設備があれば移動、乗艦も簡単に出来得るのですが、小さな栈橋の場合は一度舳に乗せて本船へ搬入となるのです。

日本軍の九五式戦車は六・五トンの重量があり、五七ミリ砲一門、重機関銃二銃を備え、一七〇馬力でした。これに対しソ連（ロシア）の戦車は、T三四型の中戦車とKV型の重戦車は三七トンで、まるで鋼鉄の山が動くごとでした。米軍のM三、M四は強力な重火器を搭載し、三七トンから四〇余トンの強力な戦車でした。まるで横綱に対する幼児のごとくで、このことは軍の上層部ではなにを考えていたのかと思います。

昭和十四年五月十一日、外蒙古ノモンハンにて日本とソ連の戦闘（ノモンハン事変）のあった

時、ソ連戦車の一方的進攻になすすべなく、第二十三師団が壊滅したのでした。

「機甲作戦要務令」の戦闘の要訣は「偉大なる機動力と突貫的攻撃力を以て急襲し一挙にこれを殲滅するに在り」と大迎に示されています。また「敵戦車の側面、背面に包囲機動し、あるいは障害物通過時は弱点なるを求めるなどにつとめて主導的放胆な行動せよ」と、忍者作戦のごとき「戦訓」も在ります。彼我戦車の性能・格差を熟知し、周到なる戦闘準備が「戦車運用の鉄則」です。戦車運用作戦「一車進まざれば一車を捨て、二車進まざれば二車を捨て、友軍たりと敵たりと問わず、乗り越え、踏み越え慕進あるのみ。側面攻撃は不断受けるものと覚悟せよ、停止応戦は、全滅をまねく、よって敵禁す」とあり、なお挺進赴難、進襲突進「これ戦車精神の神髓なり」でした。

昭和十七年四月、六、七〇〇トン級位の輸送船

(戦時標準船)に乗船、関東州の大連港に上陸しました。そこから列車にて公主嶺の旧陸軍戦車学校に行き、ここで一時駐留しました。以来、部隊単位の猛訓練が日夜にわたり行われました。

昭和十七年九月に東部国境地帯の要衝勃利(ウラジオストク対策)に駐屯しました。部隊名称は満州第三百七十三部隊で、馬来進攻作戦編成が解除となり、平時編成となり、自分は本部所属から、第一中隊本部勤務となりました。職務は従来通り連隊本部勤務で、演習出動時は副官戦車の操縦士で、概ね本部車廠に常住して、車輛整備・点検等を行い、常時出動可能体制を維持するという勤務に従事しました。そして関東軍特別大演習(「関特演」と云う)に参加しました。この時点で、満州在住軍団の総数は「百万人」と言われていました。

日本内地の各留守部隊も大動員を行ったのとことでしたが、勿論、現地の大演習も大変なものでした。中には昼夜転倒と云って、夕闇迫る頃に起

床喇叭が響き渡り、反対に東天が白み東雲を透かして一条の光が大地に流れる時に、消燈喇叭で就寝しました。夜半の天空には腕を上げると北斗七星に手が届くようでした。

また、夏季は大変難渋しました。河川や沼・湿地が多くあって、これが戦車の進行の妨げになり、行動不能となります。機甲令にあるごとく「不動戦車は自爆したのと同じ」です。

反転して冬季節は大地は凍て付いて鋼のごとくになり、丘も河も沼もすべて進撃に支障なく行動可能でした。但し零下三〇度にもなると戦車の機関が凍るようになって、始動ができなくなるために、夜間は二〇分間隔で始動し暖めるのです。各中隊は兵員が多いから協力しながら交代で行うが、本部は操縦手が少ないために、毎日睡眠不足になって苦労しました。

また、進行には高速行動が要求されます。凍結路上の走行は滑り防止の鋏をキャタピラーに着装することになります。その鋏の数量が防滑並に速

度に深く関係します。そのため、その時点での判断は非常に難しく、その判断は熟練した（身体で体験した）操縦士のみ知るところでした。

昭和十八年九月、「絶対国防圏確保」の方針が大本営で決定され、関東軍司令官より通達が参りました。それには「爾今、我が部隊は訓練の重点目標を南方に向け、対アメリカ軍戦闘に置く」と明示されました。

自分の愛車には連隊副官、戦車長中尉、無線通信係（暗号解読）将校、砲手下士官、重機関銃手と自分の操縦士と計六人が常時常務していました。弾薬類は、砲弾八〇発、銃弾一五〇〇発を常備し、弾倉庫に予備弾薬一〇〇発と銃弾四〇〇〇発を備え、まるで動く弾薬庫のごとくでした。だから敵弾を一発喰えば自爆炎上です。そして敵の集中砲火を突破しての任務遂行は操縦士の腕の見せどころです。

なお「絶対国防圏確保」に基づいて、種々の指

令並に部隊の移動などがありました。関東軍から南方戦線に引き抜かれて出動した兵科部隊もかなり多数の部隊でした。我が戦車第二師団からも、戦車第一師団へ移動した中隊がありました。その詳細な序列は、帝都防衛として大本営・第一総軍・第十二方面軍・第三十六軍の隷下部隊の戦車第一師団（拓兵团）でした。これに準じて、関東軍各兵科からもかなりの兵員が「帝都防衛」の名称にて関東方面に引き上げて行きました。と同時に、南方戦線への移動も激しくなりました。

昭和十九年八月、戦車第六、第七、第十連隊を基幹とする戦車第二師団（撃兵团）に出動命令が来ました。行先はマニラ（フィリピン）でした。自分の戦車第六連隊・副官車は実によく走り廻って、その任務を最大限に発揮しました。

昭和二十年一月九日、有力な米軍機動部隊が来襲し、米軍がリンガエン湾に上陸以来約三カ月間、「撃」兵团は防戦・奮闘し、最後は敵弾に倒

れた愛車に点火、爆破炎上して終了しました。自分はこの時点で鉄の箱の戦車が生命の有る物体に見え、惜別の情が胸奥に走ったのです。この死に物狂いの比島戦記は既刊「平和の礎」第十一巻に掲載済みです。

わが軍歴はマレー作戦（富集団）、満州警備（機甲軍）、フィリピン戦線・玉砕戦（撃兵团）等々に従軍参戦して、それぞれの貴重な体験でも五体の中にあつて冷え切っておりません。次世代の人々に伝えたい熱気がいっぱいです。半世紀を経た今も、私の戦後は終わっていないと思います。